

わたしの聖戦

◎◎女性が働くということ◎◎ 17

医学ジャーナリスト 植田美津江

映画に見る「カッコいい」女たち

女性が強くなったといわれる昨今、女性を主役にした映画など珍しくも何ともないし、女性ヒーローが悪と戦う姿もそう目新しいとはいえない。

しかし、時代を経た今も尚脳裏に残り、いつその映像を見ても「カッコいい」と思える女性はそう多くない。つまり「ほれぼれ」するほどの女性といえればやはり限られてくる気がする。

たとえば、ジョン・カサベテス監督の「グロリア」(米・1980年)に登場するジーナ・ローランズ。ふとしたことから友人の子供(男の子)をやくざから守る役割を押し付けられるヒロイン

の悪戦苦闘ぶりは、なかなか見ものである。しかもこの女性はくだんのや

くざのボスの愛人でもある。自らもアウトローな世界に身をおきながら、ボスをはじめやくざな男

どもと戦う姿は思わずカッコいいと呼ばすにはいられない。主役のJ・ローランズは、公開時すでに50歳。顔のしわも動き

の鈍さも年相応である。若い女性ばかりが好まれる日本ではこういった映画が登場すること自体ま

ず考えられないが、中年を過ぎた女性の「潔さ」や「捨て身」は、表現のしかたによっては充分美しい。「グロリア」は、同じ

タイトルで1998年にリメイクされたが、こちらの主役はシャロン・ストーンであった。彼女の美貌と知性は定評のあるところだが、はつきりいって駄作以外の何ものでもなかった。

もうひとつ印象的なのは「私がウオッシュウスキ戦う羽目になる。K・ターナーは「白いドレスの女」でメチャクチャ色っぽい悪女を演じた。「私が」でも、探偵といいつつ真つ赤なピンヒールのパンプスとミニスカートの抜群の脚線美を見せてくれているが、その度胸のよさと豪快な振る舞いは男も顔負けとい

雌ひょうのような……



つていいだろう。中年になり、やや太った彼女のヒット作は「シリアルママ」。極く普通の主婦という役どころながら、とにかくちよつと気にいらぬ連中を容赦なく殺していくという、摩訶(まか)不思議な映画であった。カッコいいというよりややクレージーであったが、K・ターナーのファンは大喜びで賞賛していた。

「ジェフ・カーニー監督による1991年の映画である。主役はキャサリン・ターナー。ウオッシュウスキーという難しい発音の名を持つこの女性には、探偵業を仕事としているのだが、これもちよつとしたきつかけで怪しい男たちと体を張って

こういった女性たちの共通項はいくつかある。まずセクシーであること。決して男性に媚(こび)を売っているわけでもな

いの、ふとした仕草やせりふに大人の色気が漂っている。まためっぽう情にもろいのも特徴で、危険をかえりみることもなく自分にとって大事な人間や弱者をとことん守ろうとする。動物でいえば雌ひょうのような野生の魅力がある。

たかが映画でといってしまうはそれまでだが、カッコいい女性の姿はむしろしゃくしゃくしたときには最高のストレス解消になるし、また勇気をもたらした気になるものだ。

しかし、概して男性陣は、この種の映画を敬遠する。自分たちより女性がかっこいいと居心地が悪いのかもしれないし、ありえないことだと考えているのかもしれない。でも機会があれば是非どうぞ、何といっても食わず嫌いは一番よくないのだから。

(財)愛知診断技術振興財団理事・研究所長

イラスト・三浦義雄